

著書紹介

『森と庭園の英国史』（文春新書二六六）

文藝春秋、二〇〇二年八月二〇日刊、新書版、二〇六頁、定価六八〇円

遠山 茂樹

はじめに

本書は、イギリスの歴史散歩とでもいうべき一般書であり、いわゆる専門書ではない。この点は、まずもってお断りしておかなければならない。

したがって、専門の歴史研究者からすれば、本書にもりこまれた歴史的事実ひとつをとってみても説明の不十分さは否めないであろう。だが、なにぶんにも一般読者を対象とした〈新書〉という枠内では、研究史をふまえ

て十全の叙述をおこなうというのは筆者の能わざるところであつた。むしろ、正直に告白すれば、衡学的になりかねない学説の提示は、筆者自身が最も避けたかったことでもあつた。

さて、本書において筆者が設定した散歩コースは、四つある。第一は庭園、第二はプラントハンター、第三は森と兎、そして第四は貴族と狩りである。どのコースを採るか読者次第だが、イギリス・カントリーサイドの景観に刻まれた歴史を四つのフットパスに沿つてたどつてみようというのが、本書のねらいである。

一般書ゆえに、本来ならば大学の研究論集の類に自ら筆を執って紹介するのも憚れるのだが、ここは大方のご了解をいただき、本書では紙幅の関係上割愛した話題や補足的説明をつけ加え、もって紹介の責を塞ぎたいと思う。本書の構成は次の通りである。

はじめに

## 第1章 英国庭園のルーツ

「庭師」イギリス人／オレンジとチューリップ  
幾何学の勝利／整形庭園をつくった名コンビ  
イングリッシュ・ガーデンの出現／イタリアの光  
政治的記号としての庭／よみがえる廃墟  
緑の指をもった男／ゲニウス・ロキに訊く  
花への回帰／毛氈花壇と鉄道

## 第2章 植物の狩人物語

花をたずねて三千里／キュー植物園の父  
プラントハンターの鏡／パンの木遠征隊

キュー再建の切り札／大鬼蓮に魅入られる  
ゴムの木移植作戦／キナの木を探せ  
シヤクナゲ・ブーム／コレクションへの妄執  
レディ・トラベラーの活躍／帝国の拡大と植物園の役割

## 第3章 森と兎のいる風景

フォレストとウッド／ブリテン島の兎たち  
森の悪代官／ウインザーの森と城  
イギリス最大の森林公園／海軍を支えたオーク  
ワーズワースが魅せられた森／植林は紳士の義務  
ブーサンの森を喰いあさった鉄／ピープスの時代の兎  
ピーターラビット誕生から百年／「森の国」は美しき誤解

## 第4章 ジェントルマンと狩り

ジェントルマンとは何か／狐狩りと競馬の隆盛  
兎狩りと兎追い／特権化する狩り  
ラブラドル・レトリヴァ人気／密猟ギャングの暗躍

狩猟協会の成立と闇市／駅馬車で拡大した闇ルート  
ライセンス制度の導入／動物虐待ゲーム

狩猟崇拜の浸透／「イタリアにはふしぎな力がある」  
ブレア政権が抱える問題

あとがき

主要参考文献

## I

第一章では、昨今わが国でもブームの英国庭園の歴史を概観する。

扱われている時代は、おおよそ十六世紀から二十世紀はじめにかけて。具体的には、中世の修道院に付属した<sup>ヘアガーデン</sup>薬草園の流れを汲むチューダー・ガーデンから、二十世紀初頭に確立したコテッジ・ガーデンまで、その形態上の特徴や庭園を彩る植物などがいくつかの事例とともに述べられている。

イギリスの庭園史をふり返ってみると、とりわけ近世

以降、イタリア、フランス、そしてオランダの影響を強くうけていることが明らかである。十八世紀にはイギリス独自の庭園が誕生するが、イタリアに端を発した整形庭園の影響は当時にあつてすら色濃く残存していた。

庭園史上、興味深い問題を含んでいる十八世紀の英国風景式庭園については、代表的な造園家や苗木商も含めてやや詳しく述べたつもりであるが、以下、補足的な説明を加えつつ、改めて要点を記しておく。

イングリッシュ・ガーデンという言葉は、本来、十八世紀に地主貴族によってつくられた「風景庭園」land-scape gardenを意味し、「イギリスの庭」一般を指すものではなかった。風景そのものを庭に見立ててつくられた英国式風景庭園は、従来の伝統的な整形庭園とは異なり、不規則で非幾何学的な点に最大の特徴があった。それは十八世紀のイギリスで誕生し、やがて全ヨーロッパに普及していった。その名残は、今日でもドイツ語の *englischer Garten* が *Landschaftsgarten* と、またフランス語の *jardin anglais* が *jardin paysager* とそれぞれ同義であるところに看取れる。

十八世紀イギリスを代表する造園家といえば、やはりランスロット「ゲイパピリティ」ブラウンであろうか。本書でも御多分にもれずとりあげたが、ブラウンが英国庭園史上傑出した地位を占めているのは、彼の独創性というよりは顧客層の大半が貴族だったという事実によるところが大きい。

実際のところ、最近の庭園史研究によれば、ブラウンが手がけた庭園の多くは既存のパークを「改良」したにすぎなかったことが明らかにされつつある。ブラウンの造園家としての独創性については従来の庭園史では過大評価されてきたように思われ、筆者は本書においてその相対化を意図した。

ブラウンが手がけた風景庭園の外縁には、必ずといっていいほど森があった。森には視界を遮る効果がある。ブラウンの庭は、十七世紀後半以降さかんにつくられた幾何学式整形庭園とちがって壁や塀がなく、外の自然に向かつて「開かれた」庭だった。だが、彼の手掛けた庭園は、その外周を縁取る森によって庶民の世界とは隔絶されていた。その意味で、ブラウンの風景庭園はすぐれ

て貴族的な〈閉じられた〉庭だったのだ。この〈閉じられた庭〉のパラドクスを見落としてはならない。

また、当時の風景庭園は、農業生産活動とは無縁の自然景観を呈しているが、それはあくまで表向きの顔でしかない。実際には、庭園は「農の要素」を含んでいた。本書でもとりあげたレスター伯爵所有のハウカム・ホールハウカム・ホールの庭園はその典型といえよう。

庭園は他方で、貴族のレジャーの場、ことに乗馬やキジ撃ち、あるいは鹿狩りの場としても重要な役割を演じていた。端的に言えば、英国式風景庭園は、たんなる美的鑑賞物ではなかったということだ。この点に関する筆者の理解は、英国イースト・アングリア大学のランドスケープ・ヒストリアン景観史家トム・ウィリアムスンの著作に多くを負っている。

さらに、庭園史家ジョン・デイクソン・ハントが指摘しているように、イタリアの影響は庭園の領域でも色濃く残存していた。イタリア式庭園は十七世紀後半以降、フランスやオランダから「新風」が吹き込んできた時ですら温存されていた。本書の第三章で取り上げたジョン・

イーヴリンは、熱狂的な親イタリア派のひとりだった。

十八世紀のイギリスでは、政治・文化・建築の分野で、イタリア・ルネサンス、さらに遡って古代ローマを模範とする風潮がみなぎっていた。当時のカントリーハウスが左右対称の端正なパツラーディオ様式をとっているのは、そのひとつの表れである。そうしたなかで、ひとり庭園だけがイギリスの独自性を発揮しえたという従来の見方は、いささかバイアスがかかりすぎていたと言える。本書は、その修正の必要性を示唆している。

十九世紀になると異国植物の流入、品種改良、温室の発達に伴い、イギリスの庭にも花の要素が復活する。十九世紀イギリスの新興住宅地にできたヴィラの花壇は、その所産である。

ところで、今日、イングリッシユ・ガーデンというと、一般的にはイギリスの田舎にある素朴なコテッジ・ガーデン(cottage garden 田舎家風の庭)を指すが、その確立者とされているのがガートルード・ジークルである。この二十世紀を代表するガーデン・デザイナーは、次のように述懐している。

「イングランドの路傍をこのうえなく美しいものに仕立てあげている小さなコテッジ・ガーデン。私は、そこから多くのことを学びました」。(J. Taylor & A. Lawson, 1994)

ジークルにとって、コテッジ・ガーデンのもつ素朴な佇まいは、何にもまして代えがたいものだったのだ。

元来「コテッジ」とは、つましい小屋を意味し、従って、コテッジ・ガーデンといえば田舎家に附属した「何でもない庭」のことだった。一説によると、われわれが知ることのできる歴史上最古のコテッジ・ガーデンは、間接的ながら、ジェフリー・チョーサーの有名な『カンタベリー物語』(一三九〇年代)やウィリアム・ラングランドの『農夫ビアズの夢』(一三八五年頃)に登場する農夫の庭だという。

中世以来のコテッジ・ガーデンは、紆余屈折を経て、ジークルによって再評価されたという見方もできよう。本書でも指摘したように、ジークルは中世職人の手仕事を重視したウィリアム・モリスの美術工芸運動に傾倒していた。モリスが大きな影響を受けたとされるジョン・

ラスキンは、中世ゴシック建築を称揚した人物である。ジークルが中世的な郷愁を漂わせるコテツジ・ガーデンから創造的靈感を受けたとしても、何ら不思議はないのである。

## II

第二章の主題は、プラントハンター(植物探検採集家)である。

本章では、プラントハンターの概括的な定義から始まり、各プラントハンターの経歴とその具体的活動、キュー植物園の重要性と植民地植物園の役割、そしてプラントハンターを生み出した風土などについて言及している。

イギリスが今日のようなガーデニング大国にのしあがったのも、もとはといえばプラントハンターたちの植物採集活動によるところが大きい。《植物帝国》の中枢に位置していたキュー植物園は、プラントハンターの温床でもあった。その意味でも、キュー植物園とその頂点にあった園長の果たす役割は大なるものであったことが理

解されよう。

本書でも指摘したように、ゴムやキナノキなどの有用植物は、イギリスに莫大な利益をもたらし、また植民地経営の安定化につながった。近代のプラントハンティングはイギリスの海外進出と密接なかわりを持っており、イギリスの「帝国」としての膨張と軌を一にしていた。イギリスの紅茶文化の成立も、茶の木をめぐるプラントハンターの活躍やインド及び西インド諸島におけるサトウキビのプランテーション経営を抜きにしては考えられない。植物は「帝国」を巡り、「帝国」を支えた。

花の狩人たちが未知の植物を求めて足を踏み入れたフィールドのひとつは、南米大陸アマゾンの流域だった。ここでは、本章でとりあげた植物のなかから大鬼蓮を選び、それに関するエピソードを補足しておく。

大鬼蓮は一八〇一年にペルーで旅行者によって目撃されていたが、最初にその詳細な描写をおこなったのは、プロシア生まれのプラントハンター、サー・ロバート・シヨムブルクだった。彼は一八三七年英領ギアナのバーベス川でこの「驚異の植物」を発見したが、その時の様

子を、「すべての苦勞がふつとび、植物学者として報われた気持ちになった」といささか興奮氣味に語っている。

一八四六年、大鬼蓮の種子がキュー植物園に届けられた。キューでは円盤のような巨大な葉をつけたものの、開花には至らなかった。これを知って心を躍らせたのは、デヴォンシャ公爵所有の名園チャッツワースの園丁ジョゼフ・パクストンだった。彼は当時キューの園長だったウィリアム・フッカーに手紙を書き、大鬼蓮の草本を一本譲り受ける約束をとりつける。一八四九年、小さな箱に入れられた大鬼蓮の草本は、ロンドンのユーストン駅から列車で最寄りのダービーシャはベイクウェルまで運ばれた。

チャッツワースには特別仕立ての大温室がつくられていた。運び込まれた大鬼蓮はヴィクトリアと名付けられ、(温)水槽で育てられた。水温はもとより、水流まで大鬼蓮の原産地のそれに合わせ、水車を使って調節するという念の入れようだった。そして、一八四九年十二月二日、ついにヴィクトリアは開花する。

この知らせはすぐさまアイルランドのリズモア城に滯

在していたデヴォンシャ公爵に届けられた。パクストンは、公爵宛の手紙のなかで、感嘆符を二つも附して、その時の様子を次のように記している。

「ヴィクトリアが開花!! 昨日、ケシの蒴果のような巨大な蕾が姿をあらわしました。まるでカップのなかに入った大きな桃のようです。威厳に満ちたその美しさは、とても言葉では言い表すことができません」。(P.Coats, 1970)

手紙の行間からは、興奮を抑えきれない様子が伝わってくる。

プラントハンターがもたらした異国の植物は、イギリスの景観を変えていった。既述のように、十九世紀ともなれば庭園にも花の要素が戻ってくる。時あたかも都市の中流階級が不衛生な都心部からの(脱出)<sup>エグゾーティクス</sup>を開始し、ヴィラとよばれる庭付きの住宅を建設しはじめた頃である。ロンドン郊外はもとより、マンチェスター、リーズ、シェフィールド、バーミンガムへ続く街道沿いに、次々と新興住宅が誕生していった。街道沿いのヴィラの一角には、ゼラニウムの針植えも置かれたことだろう。「アメ

ニティ」という概念はこうした郊外の拡大と新興中産階級の勃興から生まれ、醸成されていくのである。

一方、地主貴族の所領では、外国産ことに北米産の針葉樹が盛んに植え込まれた。十九世紀後半には、プラントハンターのデイヴィッド・ダグラスがロッキーマン脈から持ち帰った通称「ダグラス・モミ」がイングランド各地の森を覆い始める。ニホンカラマツがウェールズの丘陵地帯を赤茶色に変えていくのも、十九世紀後半以降のことだ。

ところで、本書でも指摘したように、プラントハンターの出自をみると、スコットランド出身者が多いことに気付く。周知のように、スコットランドは一七〇七年にイングランドと「合同」するが、ことに一七四五年の「ジャコバイトの反乱」以後、多くのスコットランド人がイングランドに職を求めて南下した。

たとえば、蒸気機関で有名なジェイムズ・ワットは、スコットランド・アバディーン州の船大工の息子として生まれた。のちにパーミンガムでマシュー・ボルトンと共同で仕事をするようになるが、ワットがグラスゴーか

らパーミンガムに移ったのは一七七四年のことだった。一八世紀半ばには、イギリス陸軍の連隊に属する士官の四人に一人はスコットランド人だったという。インドのマドラスやベンガル文官にも、かなりの割合でスコットランド人がいた。一七五〇年以降の一世紀間に、スコットランドでは一万人以上の医学博士を輩出したが、彼らの多くはイングランドに職を求めた（リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』）。

大局的に眺めれば、プラントハンターとして活躍したスコットランド人も、一方でスコティッシュ（スコットランド人）としての矜持を保持しながら、他方でブリティッシュ（英国人）として連合王国にかわりあつてきたことになる。換言すれば、イギリス植民地帝国は、スコットランド人にとって、みずから「スコティッシュ」であると同時に「ブリティッシュ」でもあるという帝国意識を確認する場所<sup>トポス</sup>でもあったのだ。

二重のアイデンティティを持ちながら、帝国の手つかずの最前線にも出かけていった彼らを駆り立てたものはいったい何だったのか。筆者は、いまだ明快な答えが見



出せないでいる。

今日、イギリスがガーデニング大国と言われるようになった背景には、プラントハンターの活躍や植民地帝国の拡大、それにキューをはじめとする植物園の存在があったが、それと同時に忘れてならないのが温室の存在である。これについては本書では詳しく触れていないが、十九世紀のイギリスには一種の温室ブームが到来した。ヴィクトリア朝におけるゼラニウムの流行も、温室における品種改良なくしては考えられない。

川島昭夫教授がいみじくも述べているように、ナサニエル・ウォードが発明した〈ウォードの箱〉に入れてイギリスに持ち込まれた植物の最終到着地点は、コンサヴァトリー (Conservatory) だった。コンサヴァトリーは、帝国の拡大をみごとに表象している。

もともと植物を寒さから「保護し」(conserve)、育てる温室を意味したコンサヴァトリーは、当初は独立したガラスの棟だったが、ヴィクトリア朝の時代になると、家屋に直接接するかもしくは通路で繋がれるようになる。これには、本書でもその名を挙げた園芸家ジョン・ラウ

ドンが一役買っていた。

ジョン・ヒックスが刺激に満ちた大著―そのタイトルもズバリ『温室』―のなかで述べているところでは、コンサヴァトリーに収められた熱帯性・亜熱帯性の観賞用植物は一八四〇年代までは、鉢植えが多かった。上述した園芸家のラウドンはこれを嫌い、花壇を推奨した。こうして、一八五〇年代も後半になると、露地植え栽培が普及する。一八七〇年代及び八〇年代には、コンサヴァトリーのなかに岩石や骨董品が運び込まれ、小屋や滝までつくられて、熱帯産の鳥も放たれた。

だが、二十世紀はじめのエドワード朝の時代になると、コンサヴァトリーは本来の目的から逸脱し、その多くが社交の場と化した。そこには庭専用の椅子やテーブル、編細工品が所狭しと並べられ、植物は壁際に追いやられた。椰子や羊歯植物は露地植えから、再び鉢に移し替えられた。スウェーデンの博物学者カール・フォン・リンネが〈植物界の侯爵〉と呼んだ椰子は、熱帯植物のなかでもとくに珍重され、愛好された。

大陸でジャルダン・オングレとして知られるようにな

る英国式庭園は、十九世紀後半、温室ブームを伴ってフ

ランスに上陸した。それは一八四七年、パリのシャンゼリゼ通りにウインター・ガーデン（ジャルダン・ディヴェール）を現出させ、一八五〇年代以降、著作家ノエル・ハンフリーらの支持者を得ていつそう普及していった。ノエルらの意図は、鉄とガラスの空間にブラジル、アフリカあるいはインドの異国情緒たつぷりの熱帯楽園を再現することにあつた。

温室は、まさに（地上の楽園）だった。

一八七八年のパリ万博の主会場となつたシャン・ド・マルスにも英国式庭園がつくられ、温室が設けられた。このときは園芸展も開催され、好評を博した。画家アンリ・ルソーは、この人工の（パリのなかの熱帯）に魅せられて、熱帯風景を描き続けていた。ついでに言えば、作家モーパッサンのパリの書斎も温室造りだったという。椰子の葉陰に隠微な雰囲気を漂わせながら、世紀末のパリはまさに温室Ⅱ人工楽園の生暖かい空気に包まれていたのだ。

### III

第三章は、森と兎にまつわる史話・伝承である。

本章では、日本語で「森」を意味する「フォレスト」と「ウッド」という二つの英語の語義を歴史的に説明したあと、森を舞台にくりひろげられた王の鹿狩りや製鉄業について述べ、各々の森林の現状についても若干触れている。とりあげた森は、主としてニューフォレスト、ウィンザー、そしてディーンである。

イギリスの場合、全国的な規模での植林はいわゆる「王政復古」（一六六〇年）後に開始されるが、本書ではその背景として、当時のイギリス海軍が森林枯渇に対して危機感をつのらせていた事実が指摘されている。それに関連し、当時の植林の火付け役となつた人物としてジョン・イーヴリンを取り上げている。イーヴリンは、いうところの「通人」（ヴァーチュオース）で、あらゆる分野に精通していた男だった。

フォレストが鹿との結びつき断ち、広大な森林地帯を意味するようになった背景には、フォレスト・ローの弛

緩と大規模な植林が関連しているものと筆者は考えているが、この点の検討は本書の域を超えている。

本章ではまた、史上有名な無敵艦隊「アルマダ」の海戦に関連するディーンディーンの森の秘話や、トラファルガーの海戦当時のイギリス海軍とそれを支えた森のオークに関する事柄も記されている。

兎については、在来種のヘアヘア(野兎)と外来種のラビットラビット(穴兎)の区別から、その用途の違いやイースト・アングリア地方におけるラビット飼育の歴史、さらには兎にまつわる伝承についても触れている。中世末期のいわゆる「黒死病」以後、イースト・アングリア地方ではラビット飼育が活発におこなわれるが、それが農業史のうえでいかなる意味をもっていたのか、筆者の本来の関心はこの点にある。

本書が出版された二〇〇二年という年は、『ピーターラビットのおはなし』が公刊されてちょうど一〇〇年という節目の年に当たる。厳密に言えば、『ピーターラビットのおはなし』は一九〇一年十二月に私家版で二百五十部出され、翌一九〇二年十月にフレデリック・ウォーソン社

から商業版の第一版が八千部出されたのである。

原作者ヴィアトリクス・ポターが生きた時代は、農民にとつてラビットは害獣そのものだった。それゆえ、マグレガーさんの庭に侵入した仔ウサギたちのお父さんがパイにされてしまったのも、けだし当然だったといえよう。世界的に有名なこの絵本も、兎の歴史に照らし合わせてみると、また違った読み解きができるというわけだ。森にまつわる伝承や森を舞台にした犯罪については枚挙にいとまがない。ここでは、細部にわたるといささか話が込み入ってくるため、本書には収録しなかった史話をひとつ紹介しておこう。

それは、中世イングランド王の死をめぐる出来事である。本書でも取り上げたイングランド南部ハンプシャーにあるニューフォレストは、ウィリアム一世によって設定された「新しい御狩場」だが、ウィリアム一世の後継王ウィリアム二世ウィリアム二世(通称ウィリアム・ルーファス「赤顔王」)は、一一〇〇年八月二日、この森で狩りの最中に流れ矢をうけ、それがもとで落命した。今日、森の一角にはその記念碑が建立され、矢を放ったとされる騎士ウォール

ター・ティレルの名を冠したバブもある。

年代記作者ウィリアム・オヴ・マームズベリによれば、ルーファス王と行動を共にしていた廷臣ウォルターは、事件後すぐさまノルマンディに逃亡した。一方、ルーファスの弟ヘンリーは、間髪を入れず王の財宝庫が置かれていたウィンチェスターに急行し、それを押さえたうえで、八月五日ウェストミンスターでロンドン司教の手によつて戴冠された。

ヘンリーにしてみれば、当時イングランド王位を狙っていた長兄のノルマンディ公ロベールが十字軍から帰還する前に、イングランド王位を手中に収めておく必要があった。新王ヘンリーは、即位後ただちにウォルター・ティレルの妻アデリザの親族を厚遇する。彼女の兄リチャード・オヴ・クレアはイーリ司教に、また彼女の伯父ウィリアム・ギファードはウィンチェスター司教にそれぞれ叙任された。

ここから、ルーファスの死は不慮の事故ではなく、ヘンリーとクレア及びギファード両家の共謀による謀殺ではなかったか、という陰謀説がまことしやかに囁かれる

ことになったのである。

事故か陰謀か、はたして真相は？

これについては、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校のウォレン・ホリスター教授がルーファスの死は仕組まれた陰謀ではなく、単なる偶発的な事故にすぎなかったことを立証している。

そもそも関連する最古の史料であるアングロサクソン年代記や修道士エドマーの年代記には、致命的な矢を放ったとされる人物の名は記されていない。ヘンリー二世の側近のひとりでウェールズ出身の歴史家だったギラルドウス・カンブレンシスにいたっては、ウォルターとは別の人物の名をあげているほどのだ。

ウォルターが大陸に逃亡したのは、彼の仕業だという噂が瞬時にひろまったため、亡きルーファス一味による復讐を恐れてのことと推測される。ウォルターは後日、サン・ドニ修道院長シュジェールが主宰する裁判においても最後まで自分の無罪を主張し、ルーファスが矢をうけた時、現場には居合わせていなかったとすら証言している。

ヘンリー一世によるクレア及びギファード両家の処遇

に關していえば、まずリチャード・オヴ・クレアに対する司教職の授与は、不安定な王権の支持基盤を固めるためにとられた当然の措置であつたと考えられる。当時、長兄ロベールはイングランド侵攻を企てており、ヘンリーのイングランド王位も不安定きわまりないものだった。有力家門であつたクレア家の支持をとりつけることは、ヘンリーならずとも王位にあつた者にしてみれば、焦眉の急であつたにちがいない。

次に、ウィリアム・ギファードはルーファス王の下で<sup>チヤンセルラ</sup>尚書部長官の要職にあつたので、彼がウィンチェスター司教職を授かつたことは、当時の慣行からすれば何ら不思議なことではなかつた。ウィリアム以前に尚書部長官をつとめた六名の人物は、すべて司教職を授与されており、ウィリアムの司教叙任も顯職にあつた者に対する<sup>パトロニザ</sup>恩恵授与（引立て）のひとつであつたと考えられる。

ルーファスの時代に、ヘンリーがクレア家、ギファード家あるいはウォルター・ティレルと親密な關係にあつたという証拠もなく、また、ヘンリーのように戴冠式を急ぎ挙行するというようなことも、決して先例がないわ

けではなかつた。ルーファス自身、父王ウィリアムの最期を見届けることなく、戴冠を急いでいた事実があるのだ。以上の諸点を考慮すると、ホリスター教授が述べているように、ルーファスの死は仕組まれた陰謀というよりも、むしろ不慮の事故とうけとるほうが自然であろう。実際のところ、狩猟中の事故はさほど珍しいことではなかつた。ウィリアム征服王の第二子リチャードも、ニューフォレストで鹿狩りの最中に樹木に激突し、致命傷を負っているのである。

## IV

第四章の主題は、ジェントルマンと狩りである。

本章はジェントルマンの定義から始まって、狐狩りと競馬の隆盛、囲い込み運動と障害競馬の關係、兎狩りと兎追い競走などに言及し、ジェントルマン階級がカントリーサイドを舞台にくりひろげた狩りの諸相を明らかにしている。

そのなかで、たとえばドッグ・レースが兎追い競走（へ

ア・コーシング）から生まれた事実や、各種の犬と狩りとの関係が指摘されている。

さらに、本章ではジェントルマン階級が〈狩り〉を独占しようとするため、そのための法Ⅱ狩猟法<sup>ハンティング・ラウ</sup>を制定していた事実が明らかにされている。ジェントルマンが狩猟に興じたことはよく知られているが、議会议定法に基づいてその独占をはかっていたという事実は、少なくとも従来的一般書では、ほとんど取り上げられることがなかったように思われる。本書は、ささやかながらこの間隙を埋めることを意図している。

狩猟法によって、狩りは土地所有階級であるジェントルマンの〈特権〉と化した。狩猟権を認められたジェントルマンたちは、自分の土地はもとより、他人の土地においても自由に狩りをする権利が認められたのである。狩猟（法）は、イギリス近代における地主寡頭支配の知られざる一面を浮き彫りにしている。

本章の後半部分では、密猟の組織化と密猟ギャング出現の歴史的背景や庶民の娯楽であったアニマル・スポーツについて述べている。また、現在でもしばしばイギリ

スのマスコミメディアを賑わしている狐狩りの問題についても触れている。

狐狩りは、植民地インドにも持ち込まれた。本国のジェントルマン的生活様式は「帝国」にまで及んでいたのである。イギリスはジェントルマンの国だ、という言葉い回しはいささか古きに失した感があるが、ジェントルマン階級が近代イギリスの支配層であったことは紛れもない事実だ。

実のところ、本章の執筆過程で筆者の脳裏から離れなかったのは、〈ジェントルマン支配〉とは何か、〈帝国の支配〉とは何か、という古くて新しい問題であった。

イギリス資本主義の推進者は、イングランド北西部の木綿工業を中心とする産業資本家層だったというのが通説だが、ケインとホプキンスのいわゆる〈ジェントルマン資本主義〉はこれに対する見直しを迫った。両者によれば、イギリス資本主義の担い手は「ジェントルマン資本家層」（地主貴族・金融貿易業者・専門職従事者）にほかならず、彼らに主導された非工業的なサービス部門が資本主義の発展を推進していったのである。

産業資本家層の役割を軽視している点やジェントルマン

至上主義には対しては、門外漢の筆者ですら多少なりとも疑問を抱くところであるが、帝国の拡張はある種ジェントルマン秩序の輸出であつたという側面は否定できない。

オックスブリッジや第三の大学ともいえるロンドンの名門法学院で高い教育を受け、古典的な教養を身につけたジェントルマンは、みずからの本拠であるカントリーハウスの所在する田舎で余暇を楽しんだ。その最たるものが、狩猟であつたことは言うを俟たない。

ことに、十八、十九世紀のジェントルマンが熱中したのはキジ撃ちだった。プラントハンターが持ち込んだ各種の針葉樹はキジに止まり木を提供し、シャクナゲはキジの格好の棲処となった。キジもまた、プラントハンターの恩恵に浴したのである。

猟場を所有していた地主貴族は、キジの密猟者には厳重な監視の眼を光らせていた。そのために専従の<sup>ゲームキーパー</sup>猟場番人も雇った。密猟者とゲームキーパーはしばしば衝突し、『密猟戦争』をくりひろげた。そのエピソードをひとつ、マンシュの『ジェントルマンと密猟者』（本書

巻末の参考文献を参照）から引いておこう。

「一七七五年クリスマス夜のことで、六人の男がノーフォークにあるウォルポール卿所有の森に侵入した。彼らがキジ撃ちを開始し、銃声が鳴り響いた途端、猟場番人のセバステイアン・ダニエルは密猟者の存在に気づいた。ダニエルは何人かの助太刀とともに、密猟者を追跡した。男たちに近づくと、そのうちの一人が銃をかまえダニエルめがけて発砲した。ダニエルは大腿部を撃たれ、重傷を負った。密猟者たちは逃走した。

それから三年後、この事件に関わった五人の男がノーリッチ城内の牢獄に収監された。全員が犯行現場の森の近くにある村の出身で、一人は農民、もう一人は老いた織布工で、猟場番人のダニエルを撃ったのは、トマス・ベルという靴製造人だった。最終的に巡回裁判においてベルひとりだけが有罪宣告を受け、死刑を申し渡された。一七七九年四月三日、彼は二万人ともいわれる大群衆の眼前で絞首刑に処せられた」。(P.B.Munche, 1981)

通常、密猟者は殺人を犯していない限り、絞首刑に処せられることはなかった。だが、当時の裁判官はしばし

ば見せしめとして、こうした公開処刑を断行したのである。この事件は、貴族が風景庭園づくりにいそしんでいた十八世紀後半のイギリス農村社会の一断面を象徴している。風景庭園の重要な構成要素であった森は、一面において密猟者と猟場番人のアリーナでもあったのだ。

地主貴族は、密猟者に対しては容赦なかった。たとえば、一七四八年のこと、二人の若い男がコバム子爵（本書の第一章でとりあげたストウ庭園の施主）の猟場に侵入し、現行犯で捕まった。

「捕まった男たちの妻がストウで面会を求め、夫の命乞いをした。齢八〇になるコバム翁は、妻たちの涙に心を動かされたように思われた。コバム卿は、一定の日までには、夫を彼女らのもとに帰すことを約束した。事実、夫たちは帰ってきた。その日、夫たちの遺体が荷車に載せられ、彼らの自宅の戸口まで運ばれてきたのである。コバム卿はこれを記念し、猟場に死亡した男たちの、肩に鹿を担いだ像を建立した」(S.Daniels and S.Seymour, 1990)

鹿の密猟者であることが一目でわかるように、意匠を凝らした像まで建立するという当時の一貴族の心性を、

われわれはどのように理解すべきであろうか。

パークランド（猟場）に侵入した密猟者は、一步間違えば奈落の底に突き落とされた。たとえば、一八二三年、ケント州を騎馬行脚していたウィリアム・コベット（本書の第四章参照）は、さるパークランドの警告掲示をみて当時のパークランドがもつ二重の意味を理解したという。そこには、こう記されてあった。

「楽園。ここにはバネ銃と鋼鉄製のワナが設置されています」。

文字通り、一步間違えば大変な事態になったにちがいない。こうしたバネ銃や人捕り罠は、本書でも指摘したように、十八世紀後半にはすでに全国各地で一般化していた。それは密猟戦争が激化した時期と重なり合う。

十九世紀後半には、イギリス本国の狩猟崇拜は、「帝国」の隅々にまで及んだ。スポーツとしての狩猟は、十九世紀末から二十世紀はじめにかけて、帝国のエリートたるジェントルマンによって盛んにおこなわれた。しかも、その過程で本国の狩猟法が「帝国」にまで移植され、先住民たちは従来持っていた狩りへのアクセス権を奪わ



れてしまうのである。アフリカの自然保護区は、こうした歴史的状况のなかから生まれてくることを忘れてはなるまい。そしてそれは、まさにジェントルマンたちが本国の所領に設定していた鳥獣保護区のエピゴーネンだったのだ。

こうして、ジェントルマンによる狩りの支配はイギリス本国のみならず、「帝国」においても貫徹されることになる。猛獣狩りの結果もたらされた「トロフィー」（大型獣の角、牙、毛皮などの総称）は、その表象でもあった。

世紀転換期にこうした猛獣狩りに従事したのは、本国のパブリックスクールで青少年時代にラグビーやサッカー、あるいはボート競技に親しんだ「英国紳士」たちだった。スポーツという言葉で彼らが認識していたもののなかに、インドやアフリカにおける猛獣狩りも含まれていたことは想像に難くない。

しかも、猛獣狩りの過程で、イギリス人は銃や馬を用いる特定の狩猟方法のみを「フェア」とし、罠や毒を用いた伝統的狩猟方法を禁止した。先住民たちを生活のための狩りの場から排除するこの「フェア・プレイ」の論

理は、あくまでも支配者たるイギリス側の論理だったのだ。狩猟もまた、〈ジェントルマン支配〉あるいは〈帝国の支配〉と深くかかわっていたのである。

## おわりに

本書の上梓に際しては、出版元の文藝春秋、わけでも文春新書部編集委員の鈴木重遠氏には大変お世話になった。未熟者の筆者を終始一貫、導いてくださったのは鈴木重遠氏であった。この文藝春秋きつての名編集者の存在なくして、本書はありえない。また、文藝春秋出版局次長の藤田淑子さんには、お忙しいなか本書のタイトルまで一緒にお考えいただいた。おふたりには、感謝の言葉もない。この場をおかりして、改めて御礼申し上げる次第である。

二〇〇頁たらずの文字通りの小書ではあるが、本学「公益大Information」（第四号、二〇〇二年八月）をはじめ、地元では荘内日報（二〇〇二年八月三十日、九月七日、九月二十七日付け）、山形新聞（庄内版、二〇〇二

年八月三〇日付け朝刊)、雑誌『スプーン』(二〇〇二年十月号)において、本書をご紹介していただいた。

さらに、日本経済新聞(二〇〇二年九月二日付け夕刊「Book」欄)、読売新聞(全国版、二〇〇二年九月十五日付け朝刊、書評欄「今週の赤マル」、日本農業新聞(二〇〇二年九月三十日付け「著者インタビュー」)、毎日新聞(全国版、二〇〇二年十一月六日付け朝刊「企画特集ブックウオッチング」)、時事通信社ブック・レビュー(二〇〇二年八月二四日、「新書ガイド」、雑誌『本の話』(二〇〇二年八月号)、雑誌『BRUTUS』(二〇〇二年十月一日発売五一号)、雑誌『クロワッサン』(二〇〇二年十月十日特大号「最近出版されたぜひおすすめの本」)、雑誌『Hanako』(二〇〇二年十月三十日号「Book」欄)、雑誌『マイガーデン』(二〇〇二年秋号「Book」欄)などにおいても、紹介記事を掲載していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

最後に、私事にわたって恐縮だが、今は亡き母遠山けい子にも遅ればせながら本書を一冊送り届けたいと思う。人生半ばにして病に倒れ、この世を去ってから四半世紀

以上もの歳月が経過した。気のきいたことは何ひとつ言えなかった母のことだ。本書を手にしても、おそらく黙って小さく頷くだけかもしれない。

#### 【参考文献】(但し、拙著で挙げたものは除く)

- C. Warren Hollister, "The Strange Death of William Rufus", *Speculum*, XLVIII, 1973.  
F. Barlow, *William Rufus*, London, 1983.  
J. Hix, *The Glasshouse*, London, 1996.  
J. Taylor & A. Lawson, *The English Cottage Garden*, London, 1994.  
P. Coats, *Flowers in History*, New York, 1970.  
S. Daniels and S. Seymour, "Landscape Design and the Idea of Improvement 1730-1900" in *An Historical Geography of England and Wales*, London, paperback, 1990, edited by R. A. Dodgshon & R. A. Butlin.  
石井昌幸「19世紀末葉及び20世紀初頭における大型獣狩りー英領インド帝国を中心にー」『スポーツ史研究』、第七号(平成六年)  
リンダ・コリー著、川北 稔監訳『イギリス国民の誕生』、名古屋大学出版会、二〇〇〇年  
山田登世子『リゾート世紀末』、筑摩書房、一九九八年